

## ☆ 経皮消炎鎮痛剤について ☆

皮膚に貼付する製剤を貼付剤といいます。貼付剤としては、テープ剤及びパップ剤の2種類が規定されており、さらに、薬の貼付部位に効果が現れる局所作用型貼付剤(モーラステープ、ロキソプロフェン Na テープなど)や、皮下の血管から血液に成分が取り込まれることにより、全身への作用を期待する経皮吸収型製剤(ニトロダーム TTS、ホクナリンテープなど)、また、温感、冷感のあるものなど様々なタイプの製剤が存在します。今回は、当院採用の消炎鎮痛薬を例にして局所作用型貼付剤の種類と特徴についてまとめます。

医薬品名	世代	剤型	刺激成分
MS 温シップ 「タカミツ」	第1	パップ	温感
MS 冷シップ 「タカミツ」	第1	パップ	冷感
ナポールパップ 140mg	第2	パップ	—
モーラステープ L40mg	第2	テープ	冷感
ロキソプロフェン Na テープ 50mg「ユートク」	第2	テープ	冷感

**第1世代**  
MS(サリチル酸メチル)と刺激成分を含む。

**第2世代**  
NSAIDs(非ステロイド性消炎鎮痛成分)が配合されている。

### パップ剤

水を含む基剤を用いるもの。厚みがある。水分の気化熱により患部を冷やす。剥がれやすく、水分による保湿効果もある。

### テープ剤

ほとんど水を含まない基剤を用いるもの。粘着力が強く剥がれにくいいため、剥がす際は皮膚が薄い高齢者では注意が必要である。

### 温感タイプ

トウガラシエキス等温感成分が入っている。入浴の30分以上前に剥がし、入浴後直ちに使用しないよう注意する。肩こりや腰痛、神経痛など、慢性的な痛みに効果的。

### 冷感タイプ

ハッカ油成分(1-メントール)が冷感刺激成分として入っている。炎症がある、腫れている、熱を持っているなど、急性的な痛みに適している。

「温、冷」は刺激成分による皮膚の感じ方の違いを表すものであり、実際の表皮皮膚温度はいずれも低下する。

主な副作用は、光線過敏症や接触皮膚炎、アスピリン喘息などです。

光線過敏症の対策としては、貼付部位を紫外線にあてないようにすること。接触皮膚炎の対策としては、貼付部位の汗などの水分を拭きとり、清潔にしておくことや、入浴後にすぐに貼ると湿疹や腫れの原因になるので、30分くらいたってから貼るようなことなどです。

関節などの動く部位には、右図のようにはさみで切り目を入れておくと剥がれにくくなります。



図. 経皮消炎鎮痛剤貼付時の切り目の工夫